

建築主：市原市
 設計：カワグチテイ建築計画
 施工：山内工業株式会社
 所在地：市原市不入75-1

美術館の再生に見る新たな世代の建築文化の息吹き

市原湖畔美術館



前面の芝生広場と一体となった美術館

バブル期に建てられた公共施設は、美術館をはじめ数知れない。その後約20年、激しい時代・経済の荒波を経て、その存在理由を問われているものが少なくない。この「市原湖畔美術館(旧市原市水と彫刻の丘)」もその一つであり、プログラムも含めた本格的なりニューアルが計画された。

幸いだっただのは、プロポーザル方式によって選ばれた建築家が、若く将来を嘱望されるデュオであったことだ。彼らの全力を注いだ設計アプローチは、単なる施設のリニューアルではなく、既存2次部材をすべてはぎ取った上で、内外の空間的連繫を新たに読みとることから始まった。そして、ダム湖の畔の丘の上という立地条件を最大限に活かしながら、豊かな展示空間を再編集したことが特筆される。その結果、もともと内包されていた複雑な回遊動線が外部との伸びやかな関係性を獲得し、現代美術の多様な表現方法の展開が可能とした。作者等が標榜する

新たな要素としての「アートウォール」は、垂鉛メッキ折版がもつ軽くかつ鈍い質感とともに以前のRC建築の姿を一刷新した。その効果には建築的収まりも含めて賛否両論があるだろうが、若々しい建築的表現としてけれん味がない。

丁度現地調査の時期に、原広司氏自身の写経を中心とする膨大な企画展示が開催中であった。その重たく優れて宇宙的な広がりを持つ展示は、多様な動線と空間に誘われながら、新たな光と命を吹き込まれた美術館の中であって、見る者の心を奪う。交通の便の悪さにも負けず、地方の公共施設として新たなプログラムが持続的に展開されることを祈りたい。

(岩村 和夫)



アート作品と一体となったエントランスコート



展示室の吹抜を見る